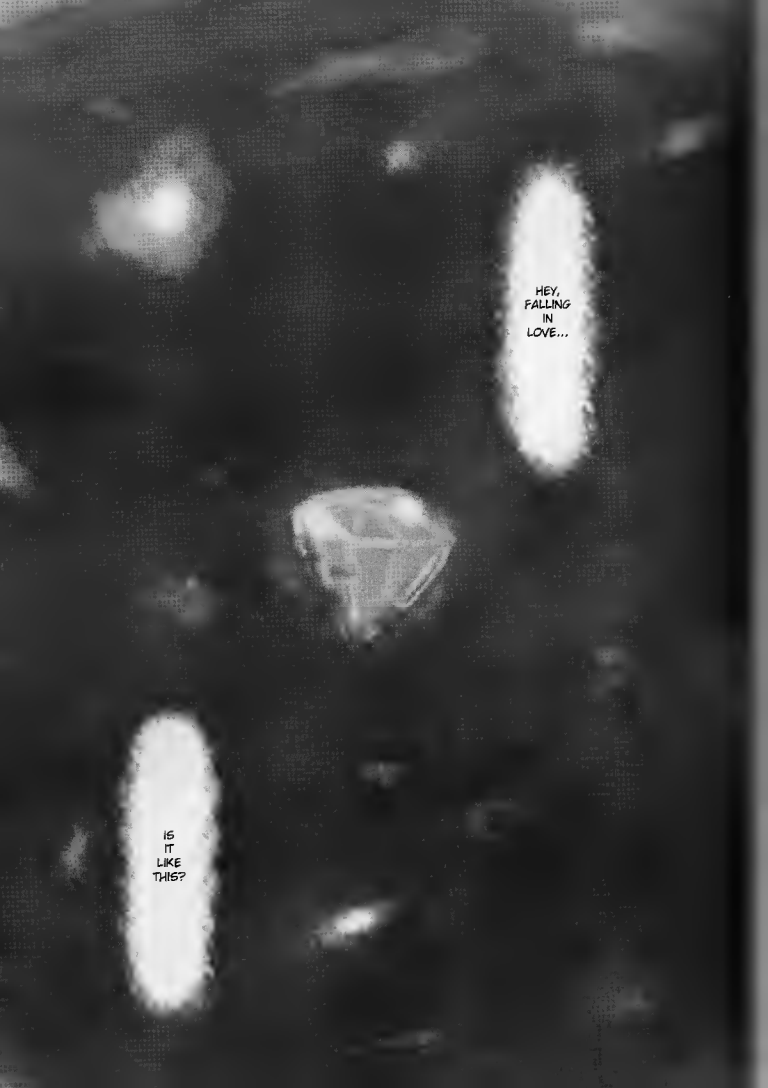

HEY, FALLING IN LOVE...
IS IT LIKE THIS?

TODAY, WE HAVE A NEW MEMBER JOINING US IN THE 501ST JOINT FIGHTER WING.
THIS IS SANYA V. LITVYAK.
SHE COMES TO US FROM THE ORUSSIAN IMPERIAL ARMY, AND SHE HOLDS THE RANK OF FLYING OFFICER. HER PRIMARY DUTY WILL BE NIGHTLY PATROLS.
WE WON'T HAVE MANY OPPORTUNITIES TO SEE HER, SINCE SHE HAS THE NIGHT SHIFT, BUT LET'S ALL TRY TO GET ALONG.
ALRIGHT, SANYA-SAN, PLEASE INTRODUCE YOURSELF.
I KNOW.
I'LL PROBABLY... ONCE AGAIN...
I'M SANYA. PLEASED TO MEET YOU ALL.
END UP ALONE.

HM?
THAT PERSON... IT COULDN'T BE.
THAT PERSON... I KNOW WHO SHE IS.
IT'S IMPOS-SIBLE NOT TO. SHE'S FAMOUS...
THAT WAS... FIRST CON-TACT.

ディア マイ ディアマイト

MORNING...? AH, NO NOON....
A FEW WEEKS LATER...
I CAME BACK FROM NIGHT PATROL...
...AND I MUST HAVE FALLEN ASLEEP WHILE CHANG-ING....
ACHOO!
ACHOO!
IT'S JUST LIKE BACK IN BRITANNIA.
EVERY DAY HAS BEEN THE SAME.
I SLEEP BY MYSELF.
I WAKE BY MYSELF.
I PATROL AT NIGHT BY MYSELF.
AND THEN AGAIN-
SLEEP, WAKE, AND PATROL...
THAT'S HOW IT'S ALWAYS BEEN.
IT'S COLD...
I GUESS I'LL TAKE A BATH....

AH
IT'S THAT PERSON...

I STILL HAVE YET TO SAY A WORD TO HER.
NO, IT'S NOT JUST HER, BUT THE OTHERS TOO.
EILA ILMATAR JUUTILAINEN. I KNOW QUITE A BIT ABOUT HER. OF COURSE, SHE DOES NOT KNOW ANYTHING ABOUT ME.
THEY SEEM TO GET ALONG WELL...
SHE MUST BE... THE ONE FROM ROMAGNA, LUCCHINI-SAN....

HER NAME WAS KNOWN ALL AROUND THE WORLD AS A DECORATED YOUNG WITCH AFTER HER FIRST BRILLIANT VICTORY.
AS TIME WENT ON, HER NUMBER OF KILLS WOULD ONLY INCREASE.
HER SKILLS WERE SIMPLY NOT A FLUKE.
THOUGH SHE COMES FROM A LITTLE-KNOWN COUNTRY IN THE CORNER OF NORTHERN EUROPE, SUOMUS, SHE HAS EARNED THE ASPIRATION OF EVERY WITCH.

"PRECOGNITION... SHE HAS THE ABILITY TO KNOW EVERYTHING THAT WILL HAPPEN BEFOREHAND. IT IS SAID THAT THIS RARE AND UNPARALLELED ABILITY OF HERS HAS KEPT HER FROM BEING SHOT DOWN EVEN ONCE.

EVERYONE THOUGHT SHE WAS LIKE AN "INVINCIBLE GEM," AND SO SHE WAS DUBBED

THE DIAMOND ACE.

AH...
UYUUUUU...
HM...?
I FEEL LIKE I'M BEING WATCHED
HM? WHAT'S WRONG EILA?
WAAAAAAAAAH
SHUT UP LUCCHINI
THERE THERE
WHAT IS SHE DOING?
HEY.
"DO I EXIST, OR DO I NOT EXIST? I SIMPLY DO NOT KNOW." THAT IS WHAT I HAVE ALWAYS THOUGHT TO MYSELF.
DID SHE SEE ME...? HOW...?

!?
STOP HIDING BACK THERE
SPYING ON US!
...EH?
IT'S ABOUT TIME YOU SHOW YOURSELF!
NO ONE...

...WHAT?
AH, NO, IT'S NOTHING.
ぽん
HM... THAT'S WEIRD...
I'M NOT MAKING THIS UP! SOMEONE REALLY WAS HERE! AH! SANYA! FLYING OFFICER SANYA!
AHHHH- NEVERMIND!
UH- HUH
SANYA?
WELL, WHETHER SHE WAS REALLY HERE OR NOT, I AM TOTALLY BEAT. I'M GOING TO SLEEP.
BUT-
キラッ
EH? WHAT'S THIS...
I'M CERTAIN! YOU KNOW... THAT ONE FROM ORUSSIA!
REEEALLY? I DIDN'T NOTICE ANYONE.
ME TOO!
*KIRA = SFX OF SOMETHING SHINY

THAT WAS SCARY...
HA
HA
HOW DID SHE KNOW I WAS THERE? HOW...
SOME-HOW...
SHE FOUND OUT.
"DO I EXIST, OR DO I NOT EXIST? I SIMPLY DO NOT KNOW." THAT IS WHAT I HAVE ALWAYS THOUGHT TO MYSELF.
EVEN THOUGH I HAVE ALWAYS THOUGHT THAT TO MYSELF....
WHY DOES MY CHEST FEEL SO WARM, I WONDER.
MAYBE THAT WAS... THE BEGINNING OF LOVE.

HMMMMMM
A PENDENT... I WONDER WHAT'S INSIDE...
THIS IS ONE OF THOSE THINGS, RIGHT?
SHOULD I OPEN IT?
THIS IS...
JUST- JUST FOR A LITTLE BIT. IT'S OK, RIGHT?
IF IT'S JUST FOR A LITTLE BIT...
KNOCK KNOCK

HEY.
ARE YOU THERE? PILOT OFFICER JULITILAINEN! IT'S TIME FOR TRAINING!
HURRY UP AND GET READY!
CRAP!
GEEZ... THERE'S STILL 15 MINUTES, BUT FLIGHT LIEUTENANT BARKHORN IS SO STRICT.
PILOT OFFICER JULITI-LAINEN!
NO.
NO.
NOT HERE, NOT HERE...
IT'S NOT HERE.

IT'S GONE...
NOT HERE.
OR HERE.
WHAT AM I GOING TO DO?
IF I CAN'T FIND IT... I....

WHEN THINGS STARTED TO TURN AROUND, I GUESS, IT WAS BECAUSE OF A MIRACLE.
FIND IT.
I MUST
...

THAT'S...
SO BRIGHT...
ドーン
ヒュン
ボカッ
ヒュン

AMAZING...
I FEEL "IT" AGAIN...
IT MUST BE...
HEY!

WHOA!
WHAT THE HELL ARE YOU DOING?! WE'RE IN THE MIDDLE OF TRAINING! FOCUS!!!
HI-
SHE DISAPPEARED AGAIN...

AH, WELL, EVERY "NIGHT" ISN'T QUITE THE SAME. THERE ARE RAINY NIGHTS. WINDY NIGHTS. MOONLIT NIGHTS. MOONLESS NIGHTS.
AND SO, I AM DOING MY NIGHTLY PATROL YET AGAIN. ALONE.
OH, THAT'S RIGHT... THE NEW MOON WILL BE TODAY...
TONIGHT WILL BE COMPLETELY DARK...
AND I'M ALL ALONE...

ドーン
SCARY.
ドーン

SPUTTER
SPUTTER
SPUTTER
SPUTTER
EH?
!!?
SOMEBODY!!!
SAVE MEEE!!!
SANYA!

I CAN HEAR... SOMEONE'S KIND VOICE.
SANYA!
-NYA
WAKE UP, SANYA.

IT'S ALRIGHT.
YOU ARE...
EVERYTHING'S OKAY.
EILA... SAN...?

THIS IS YOUR'S,
RIGHT?

MOTHER... FATHER...
I'M SO RELIEVED...
HOW...
IT'S BRIGHT...
아니

OH, YOU'RE AWAKE!
PHEW-
AH...
RIGHT NOW, YOUR STRIKER UNIT IS GOING THROUGH RE-CONDITIONING. IT SEEMS SOME OF THE COMPONENTS WERE GETTING OLD. I'VE ARRANGED FOR IT TO GET REPAIRED IN SUOMUS - IT'S ONE OF OUR SPECIALTIES.
YOU COLLAPSED DURING YOUR PATROL, SO I BROUGHT YOU BACK. ARE YOU OK?

EVERYTHING'S OKAY.

AGAIN,
AGAIN,
AND AGAIN,
SHE WOULD
REPEAT THOSE
WORDS TO ME.

mm...
mmm...

EILA-SAN?
EILA-SAN!
I CAN'T SEEM TO FIND SANYA-SAN. DO YOU KNOW WHERE SHE IS?
...IS SHE NOT HERE? IT'S UNUSUAL FOR HER TO BE SLEEPING AT THIS HOUR....
I'M COMING IN, EILA-SAN.

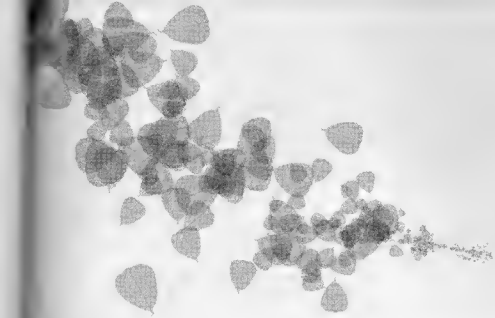
EILA-SAN, DO YOU KNOW...
OH MY...
SEEMS LIKE THEY'RE GETTING ALONG.
Fin.

そういえば話のにでてくるのは1期の記録集四 P62にでてた「サーニャのロケット」
ってやつなんですが、オフィシャルファンブックとかにも載ってると思ったら載ってなくて
知らない人は知らない設定だったことに愕然としました。すみません…
サーニャはロケットをお守り代わりとして普段から持っていて、中には両親と一緒の写真がはいっています。
これ豆知識な!!!!

Q.
サーニャさんはなんでいつのまにか
パーカーにきがえてるんですか。
自分できがえたんですか。

A.
いわせんな
はずかしい

次のページからは
ゲストのれんぴろくんの
おはなしだよ!!!



二人のトゥルーデ

れんじろー

「トゥルーデー」
「はっ？」
「なんだいフラウ」
背後から弾んだ声をかけられてバルクホルンとクルピンスキーは振り返った。昇りきった太陽の光が差し込む基地の廊下は明るく、駆け寄ってくるハルトマンの金髪がきらきらとそれを照り返している。天使のように光の粒を振り撒いてやってきたＪＧ５２の新入生は、二人の前で立ち止まると思い出したように敬礼の姿勢を取った。
「あっバルクホルン中尉、おはようございます！」
「え？あ、ああおはよう。もう昼だが…」
「あはは、フラウはお寝坊さんだね」
呆気に取られたように生返事を返すバルクホルンをよそに、クルピンスキーは小型犬のように見上げてくるハルトマンの頭を撫でつつ、寝乱れた髪を整えてやる。身だしなみに厳しい同僚の口が開きっぱなしの前に伸ばされた指先の動きは、それは丁寧なものだった。
（過保護なやつめ）
優しいが遠慮の無い愛撫をいかにも嬉しそうに受け入れているハルトマンを見ていると、なんとなく面白くなくなってくる。そんなバルクホルンのやや鋭い眼差しを向けられてもクルピンスキーはまるで動じない。にこにこと犬の飼い主よろしく細い金髪を撫で回しながら、
「どうしたんだい、朝からそんなにはしゃいで」
「うん、あのね、昨日くれたお菓子すっごく美味しかったよ！あれどこで買ったの？」
「あれは街の大通りにある洋菓子屋でね。…そうだ、今日あいてるなら一緒に行こうか。フラウも今日は休み…」
「おい待てクルピンスキー！なんださっきの呼び方は」
ハルトマンが返事をする前に割って入った声は、意図せず大きくなってしまったらしい。クルピンスキーの大きな手を頭に乗せたハルトマンのまん丸になった青い瞳が、その声量を物語っている。
「ん？ああ、エーリカが早く大きくなって素敵なお嬢さんになるようにと思ってつけたんだ。フラウって。かわいいでしょ」
「ああ、似合ってはいるが…って、そっちじゃない。なんでお前が私のあだ名で呼ばれているんだ」
「えっ？」
弾かれたように顔を上げたハルトマンは半ば色を失っている。視線の先にある、役者顔負けに整った顔は憎たらしいほど朗らかな笑みを崩さず、
「私だってトゥルーデだしいいじゃない？ゲルトルートとヴァルトルート。おそろいでしょ♪」
あくまでスペル上は正しい屁理屈を堂々と言ってのけて、一つウインクをプレゼントした。勿論、彼女のファンなら黄色い悲鳴をあげて喜ぶであろうその仕草が、バルクホルン

まで同僚をなじる事は滅多に無い。少なくともロスマンの知る限りでは覚えが、無い。
「そこまで言ってないわよ…。落ち込んでる時は、甘いものでも食べに行くのが一番でしょ？」
「落ち込んでる？ハルトマンが？」
「…まさか気づいてなかったわけじゃないわよね？」
「う、まあ最近元気が無いとは思っていたが…」
灰色の視線にねめ上げられて、途端に勢いを失ったバルクホルンは冷や汗をたらして頬をかいた。自らの非に思い当たるとすぐに自省の念が沸いてしまう所はこの同い年の上官の愛すべき美徳だが、恋人が不当なそしりを受けた手前、少々矯正してやる必要がある。
「そこまで突っかかるならあなたが気にかけてあげなさいよ」
「き、気にはかけているさ。訓練中調子が上がらないのにも気づいていたし、指導もきちんとしている！」
「あら、へこんでいる新人にお叱りをあげるのがバルクホルン中尉流のお気遣いなのかしら？」
「ぐ…しかしだな…新兵のうちからあんな風に甘やかすなど」
苦し紛れの弁明にロスマンは流石に呆れたようにため息を吐いた。その造作になんとなく、検察官に余罪を追及されているような居心地の悪さを感じて、バルクホルンは無意識に身を縮こまらせる。
「甘やかせなんて言ってないわ。ただ、もっと素直になれって言ってるの。心配なんでしょう？あの子が」
「も、もう勘弁してくれロスマン。なんだか意地が悪いじゃないか…」
「ふふ、悪趣味かしら？」
「うう…」
バルクホルンが完全に白旗を揚げて情けなく眉尻を下げた所で、ようやく追撃の手が止まる。
（こいつ、嗜虐嗜好があるんじゃないか）
ロスマンの満足げに上がった形の良い唇の端に、思わずそんな疑いを持ってしまう。
と、急に人の悪い笑みをすっと消したロスマンが、体を支えていた手を机から離した。
「でもね、真面目な話、あなたはもう少しあの子に歩み寄ってあげたらいいって思うわ」
近づいてきたロスマンの足はバルクホルンの目の前で止まった。二人の背丈はロスマンが見上げる程度には違う。にも関わらず、バルクホルンは眼下から告げられてくるであろう何らかの言葉に、なにか逆らえない予感がしている。
「…私にあの色ボケ伯爵の真似事をしろというのか？」
「ええ、それも悪くないわね」
「おい」
「上官とか部下とか気にしすぎているって事よ」
負け犬の遠吠えのような皮肉を真面目に肯定されて顔を顰めても、ロスマンはまるで取り合わない。真意を読めずに揺れている琥珀色の瞳を真っ直ぐ見つめると、ふっと柔らかに目を細めた。
「ねえ。あの子は多分、凄いウィッチになるわよ。でも、それには」
まるで我が子の将来を語る母親のように語りかけて、もう一歩近づく。息のかかる距離まで迫った優しげな表情に、我知らずバルクホルンは肩を強張らせる。
「きっとあなたの支えが必要よ、トゥルーデ」
そう予言を言い切ると、つん、とバルクホルンの胸のタイの結び目を指でつつく。にっこりと微笑んで一歩下がると、ようやくバルクホルンの体から力が抜けた。
「私の…？伯爵のじゃなくてか？」
「ええ」
「まあ、確かにハルトマンの素質は認めるが…なんでそんな風に思うんだ」
「だってあなたとあの子、相性がよさそうだもの」
今度は年相応の無邪気な笑顔でそう答えてから、ロスマンは歩き出した。話はこれで終わりとばかりに向けられた背中に、どうにも釈然としないバルクホルンは最後の反撃を思いつく。
「お前とクルピンスキーのように、か？」
にやりと笑って慣れない揶揄を飛ばすと、ぴたりとロスマンは動きを止めた。が、扉を睨むその瞳から光は消えていてる。
「…そうかもしれないわねぇ」
どす黒い気配を漂わせて歯軋りをするロス

マンの横顔に、バルクホルンは背筋に冷たい戦慄が伝うのを感じる。思い出してみれば、ここ最近のクルピンスキーはハルトマンに構いきりでさらに朝帰りが続いていたはずだ。

（…貴様のせいでやぶへびをつつく事になってしまったぞ、クルピンスキー）

そう心の中で悪態をつきながら、バルクホルンはロスマンの尻に揺れる九本の尻尾にげんなりとため息を吐いた。

秋も深まりつつあるオストマルクの空はやけに高い。無造作に並べたタイルのような雲や、街を沿って流れる川の水を、沈む夕陽がやけに鮮やかな赤橙色に染め上げている。

「はーお腹いっぱいだー」

「意外とよく食べるねフラウ…」

大柄な自分が食べた数倍の量のデザートを胃に納めたハルトマンに、クルピンスキーは流石に冷や汗を一つ垂らした。腹ごなしの散歩がてらハルトマンを連れてきた川沿いの道は、知る人も少ない彼女のお気に入りの景勝地だったのだが、満足げに腹をさするハルトマンを見るとどこに連れて行こうが変わらない気もしてしまう。

「美味しいお菓子ならいくらでも食べられるよー！あと芋！」

「はは、元気があってよろしい」

何気ない会話を交わしながら、先週より肌寒さを増した風を避けるように二つの影が寄り添って歩いていく。足の長いクルピンスキーは随分歩を緩めていたが、それでも僅かにハルトマンの歩みが遅れがちになってきた。やがて瞳をしょぼしょぼとこすり始めたのを見て、長い影が動きを止める。

「眠そうだね。おいで、フラウ」

膝を折って大きな背を差し出すと、素直にハルトマンは負ぶさった。魔力を開放すればこの程度の体重は問題ではない。ぎゅうと甘えるように腕を回してクルピンスキーの細いライトブラウンの髪に顔をすりつける。一つになった影が再びゆっくり進み始めた。

「伯爵はさ、ハンナの事どう思ってる？」

寝息の代わりにぽつりと呟かれた言葉は唐突だったが、クルピンスキーを驚かせる事はなかった。少し考えてから答えた内容は色々けているようで、声音はただ優しい。

「ん？そうだねえ、ウィッチには魅力的な子はたくさんいるけど、あれほど可愛い子はなかなかいないね。いつも一生懸命で、素直で、何より空を飛ぶのが大好きでさ」

「ハンナの事好き？」

「勿論さ、愛してるよ」

迅速かつ確かに答えると、首筋に少し呆れたようなため息がかかる。

「…誰にでも言ってるだろ、それ」

「良く知ってるね。でも本当さ、私はＪＧ５２の皆を愛してるよ」

「ああそう…」

これ以上聞いてるのも馬鹿馬鹿しそうに、今度はより大きなため息を吐く。冗談で言っているわけではない事が分かる分、クルピンスキーのこの手の言葉はどうにもたちが悪い。

（先生はちゃんと特別だろうね…大丈夫なのかな）

余計なお世話だと知りつつも、自分の師とクルピンスキーの関係を心配せずにはいられない。特にクルピンスキーに甘やかされている自覚のある身としては。

「フラウはどうなんだい？」

「え？」

「ティナの事」

自分に帰ってきた問いにハルトマンはすぐに答えられない。一歩ごと、体に伝わる規則正しい揺れは答えを急かす様子は無かった。

「…わかんない。正直ハンナうざかったし、特別仲いいってわけじゃなかったし」

「うん」

「滅茶苦茶やるせいで私まで怒られる事あるし、寝てるのに無理やり起こしてくるし」

「うん」

「だからさ、よくわかんないんだよね。ハンナがいなくなって、なんでこんな風になるのか」

ぎゅう、とどこか隙間を埋めるように回された腕に力が込められる。泣きたいわけではない。ただただすがりついた背中の少女に、クルピンスキーは酷く穏やかに目尻を下げる。

「さみしいんだね、フラウ」

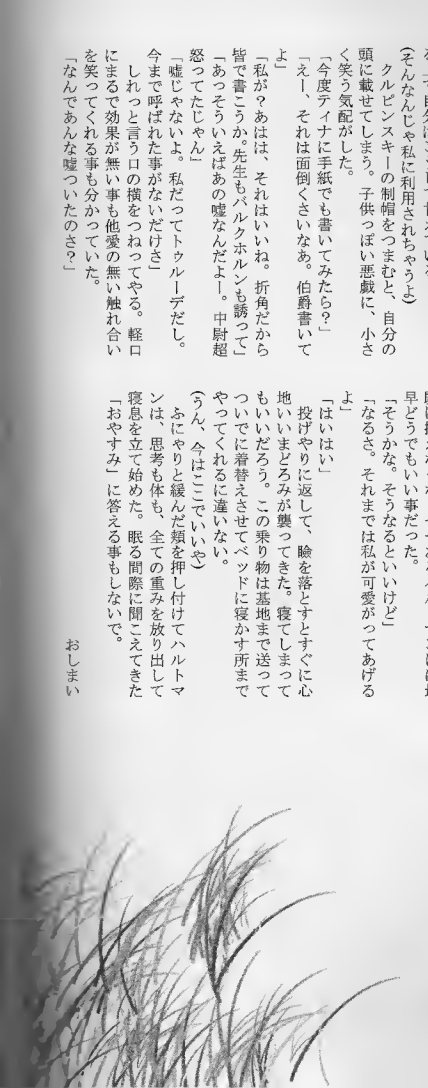
「…うん、多分」

「いいんじゃないかな、分からなくても」

家族でも、友達でも、恋人でもないのに。いなくなったら寂しくなってしまっても。

「そういう関係もあるんだよ、きっと」
名前のつけられない関係が。
ふと川の向こうを見やれば、日は既に地平に身を隠しつつある。茜色の空には薄藍の帳が混ざり始めていて、すぐ傍の水辺の輪郭も定かではない。夕と夜の狭間、曖昧な時の境目の中、確かなのはしがみついたクルピンスキーの体温だけだった。
(甘やかし上手だなあ)
皮肉ではなくそう思う。わざわざ菓子で釣って貴重な休みを潰し、今はこうして乗り物に甘んじているのも、自分の寂しさを見透かしての事だったのだろう。それを分かっている上で自分はこうして甘えている。
(そんなんじゃ私に利用されちゃうよ)
クルピンスキーの制帽をつまむと、自分の頭に載せてしまう。子供っぽい悪戯に、小さく笑う気配がした。
「今度ティナに手紙でも書いてみたら?」
「えー、それは面倒くさいなあ。伯爵書いてよ」
「私が?あはは、それはいいね。折角だから皆で書こうか。先生もバルクホルンも誘って」
「あっそういえばあの嘘なんだよー。中尉超怒ってたじゃん」
「嘘じゃないよ。私だってトゥルーデだし。今まで呼ばれた事がないだけさ」
しれっと言う口の横をつねってやる。軽口にまるで効果が無い事も他愛の無い触れ合いを笑ってくれる事も分かっていた。
「なんであんな嘘ついたのさ?」
「んー?そうだねえ、ちょっとしたお仕置きかな」
「はあ?」
「あはは、まあ、フラウと彼女が仲良くなれるようにってね」
「仲良くって…無理じゃないかな。私あんまりきちんとしてないし…」
「そんな事は無いよ。いつか、君はきっと彼女をトゥルーデって呼ぶようになる」
少しだけトーンを下げた、どこか予言者のような響きを持った呟きの意味は、振り返らないクルピンスキーから窺い知る事は出来ない。出来ないが、本格的に襲ってきた眠気に既に抗えなくなりつつあるハルトマンには最早どうでもいい事だった。
「そうかな。そうなるといいけど」
「なるさ。それまでは私が可愛がってあげるよ」
「はいはい」
投げやりに返して、瞼を落とすとすぐに心地いいまどろみが襲ってきた。寝てしまってもいいだろう。この乗り物は基地まで送ってついでに着替えさせてベッドに寝かす所までやってくれるに違いない。
(うん、今はここでいいや)
ふにゃりと緩んだ頬を押し付けてハルトマンは、思考も体も、全ての重みを放り出して寝息を立て始めた。眠る間際に聞こえてきた「おやすみ」に答える事もしないで。

おしまい



ハっめ
らくがき
ふうか
かわいい
ふうか

奥付

「すとらいくすでいず!! 6」

2011.3.27　わたしにできること

印刷：ポプルス

発行：むろ